

(5) インタビュー (その5)

『人間の生物学』について渡部元ディレクターに聞く

<日 時>昭和59年9月12日 (水)

午前10時半 ~ 12時

<場 所>放送大学東京連絡所会議室

<聞き手> 浅 野 孝 夫

(浅 野) 『人間の生物学』の全部(15本)をとりおえて、番組担当者としてどんな感想をお持ちですか。

(渡 部) そうですね。『人間の生物学』は、講師の太田次郎先生と私たちがチームを組んでやってきたわけですが、あらゆる面でうまくいったと思います。太田先生が幸いにして番組づくりについてよくご存知でしたので、作る側としてはすごく楽でした。

例えば、テレビでいくら述べても限界があると思われる分野——難解な学説や精密すぎる統計資料などは、テレビでとりあげることはやめて、もっぱら「印刷教材」にまかせることにしました。こうした点に関して、太田先生が、ご自身の考えや方針を、最初からざっくばらんに私たちにぶつけてくれたので、とてもやりやすかったです。

(浅 野) 渡部さんの立場から、特にこういう面に力を入れたとか、心がけてきたことがありますか。

(渡 部) そうですね。先ず最大の関心は、放送メディア(この場合は「テレビ」)の特性をどのように活かすか、ということでした。プロデューサーをはじめ全員のディレクターが、放送メディアの特性を活かすということをそれなりに考えていたわけです。

例えば、人間のからだの中には、白血球、赤血球、血小板などを含んだ血液が流れているよといっても、実際どういうものかということはおぼろげにしかわかりません。そこでなるべく凝った映像というか、「生の映像」を撮るなり、見つけてくるなりして、少しでも効果的に見せようということを考えてわけです。先生のしゃべっていることを、図表とかイラストにして見せれば、それで済んでしまうようなことでも、可能な限りねばって、そのものズバリを見せてやろうということです。

(浅 野) よくわかりました。「映像資料」のことはのちほど、また、伺うとして、はじめに大へんぶしつけな質問ですが、渡部さんの専攻は何ですか。生物学への関心はどの程度お持ちでしたか。

(渡 部) 私の専門は物理です。ですから生物学のことはあまりよく知りません。でも同じ自然科学の仲間ですから、別に異和感はなかったですね。

(浅 野) そこで番組担当のディレクターと講師の先生とのかかわり方が問題となってくるわけですが、今度の場合、どういう順序で、どんな話をするかという番組内容の骨子は、どちらが先に出してきたのですか。

(渡 部) 今回の場合は、太田先生がイニシアティブをとられました。私たちが最初にやった仕事というのは、太田先生からこのシリーズではだいたいこんなことをやりたいという印刷物をうけとったことでした。先生は全体の骨子を早目におつくりになっていたのですね。

(浅 野) それは「印刷教材」のコピーのことですか。

(渡 部) いや違います。各回のサブタイトルと簡単な内容を記したメモをいただきました。1回～15回のすべてについてです。また、先生が参考書とかいろいろな本を出していましたから、そういう本を手に入れて読みました。

こうして番組制作をはじめる前に、先生がだいたいこんなことを話されるのではないか、こんな素材が要るのではないかというようなイメージが何となく湧いてきました。

(浅 野) 番組制作が始まる前に、すでに全体の中のひとつというようなとらえ方ができていたのですね。

(渡 部) そうです。1回、2回だけではなしに、全体の15回では、主にどんなことをとりあげるのかということがつかめた気がしたのです。

そこで先生からいただいたメモをもとにして、簡単な構成案を作りました。いちおう2本目位までを試験的に立案しました。ここはこうやろうとか、先生の一方通行じゃなくて、そこは逆にこうしようとか、いろいろディスカッションしたわけです。

最初の1本目を撮りだすまでに、準備期間がわりと持てました。こうして先生と何回かお会いしているうちに、最初はぼんやりとしていた番組のイメージがますますはっきりしてきました。また先生の人柄もわかってきました。今思うと、最初から4本目くらいまでが、とても時間がかかりましたね。でもあとは、ひとつのシステムに乗って行けたというわけです。

(浅 野) そののところをもう少し詳しく聞きたいのですが、先生が簡単なメモをくれましたよね。その時に、この部分はこんな「映像資料」を使いたい。この箇所は、こんなパターン(図表)を使いますよ、という具体的な指示はあったのですか。

(渡 部) ありました。太田先生はこれまでも沢山の番組に出演なさっているので、よくわかっているのですね。

例えば、血液の流れを撮ったフィルムがどこそこにある筈だというメモをいただいたとしますね。

それで、そのメモをたよりにして資料にあたるわけです。ついでに次の回のものも探してみようと思ひ立ち、そこに思わぬ資料があったりするわけです。先生の本ではイラストで説明されていますが、先々探していた資料が手に入りましたからこれを使いますよとか、そんなことがよくありました。

(浅 野) 先の回のことを見通して資料を探したり、構成を考えたりすることができたわけですね。

ついでにお聞きしますが、先生とは何回くらい打合せをしたのですか。

(渡 部) 打合せは、原則として2本ずつまとめてやりました。

逆からいきますと、収録日の前々日に「映像資料」やパターンを全部チェックしていただきます。一応最終的に先生と打合せをして、大体これで資料は揃ったのですが、足りないものはないかとか、こうやったんですが、これでよいですかとか、ある箇所を変えたらどうでしょうとか話し合っただけです。

こんな具合にして、各回ごとに3～4回は打合せをやりました。

(浅 野) 1回につきどのくらい時間をかけましたか。

(渡 部) 大体1回につき1～2時間くらいかかりました。先生も大へん忙しい方ですので。打合せの場所は、大学の研究室とか、あるいは先生ご自身が外へ出られて私の局のデスクへ立ち寄られたこともあります。まあ臨機応変にやりました。

(浅 野) ところで、この番組にも外部の構成者（ライター）がついていますね。構成者はどの程度内容に関与するのですか。例えば先生と打合せをする時は、構成者もいっしょですか。

(渡 部) いえ、連れて行きません。というのは、最初の数本撮ったあとは、大体流れで作りましたから。番組全部を構成者に考えさせるというので

はなくて、「箱書き」といってラフな骨組みを作ってもらう程度です。この「箱書き」をもとにして、私とほかのスタッフとの間でディスカッションをして、最終的には私が方向を決めます。あとは先生に見ていただいて、このようにした方がいいよとか、前にもってきた方が面白いよとやるわけです。それはもう悪いことばでいえば腹のさぐり合いみたいなものです。ああ、先生はそういう考え方なのか、先生の側からは、ディレクターはこんなことを考えているんだなということです。

（浅 野）先生との打ち合わせがすんでから取材にはいるわけですね。短い期間の中で、同時進行のような形で取材をするのですから、いくつか、カベがあるでしょう。日数がとても足りないとか、予算に限りがあるとか、そんな時はどうするの。

（渡 部）そうですね。そんな時は「ありもの」を外部のプロダクションから借りるということが多かったんですね。

例えば細菌を培養するといっても、それだけで1か月はかかってしまうという場合があります。撮影できることはできるけど、それではとても間に合いません。生物学ですから、物理学の実験と違って、なかなか日数がかかるのです。そういうことが、最初の2本ぐらい撮ってわかりましたので、なるべく自前で撮影するのはやめました。その代わり、外部から適当な「映像資料」を借りて来てそれを見せるというふうにしていました。もちろん私たちも自分で撮れるものはとりました。

例えば、多摩動物園でチンパンジーの実験を撮りましたし、そのほかいろいろなところへも行きました。

（浅 野）たしかに長い期間かけて取材する“素材”は意外と多いですね。ところが今の制作条件ではとても不可能です。そんな時、外部のプロダ

クションに依頼して、金銭的なもので解決するという方法はとらないのですか。

（渡 部）それが15回のうち、2回から3回かは外部に依頼してやったのですが、長期取材のケースが1回に3か所も出てくるのです。例えば、血管の中で白血球がバイキンを食べるシーンであるとか、卵がふ化して雛が生まれた直後の“すりこみ”の習性を撮るとか——それらを全部フォローしようとすると、時間がいくらあっても足りないし、経済的にも負担が大きすぎます。そういう時は止むを得ず「ありもの」を使うことになります。

（浅 野）話題をかえまして、「印刷教材」についてですが、「印刷教材」は番組制作にはいる前までに、すでに出来上がっていましたか。

（渡 部）「印刷教材」は、先生と最初にお会いする前から読んでいました。というのは、新しく書き下された「印刷教材」は、最初の番組を撮り終えた頃にちょうど最終校正の段階だったのですが、実は5年程まえに、太田先生が出演した実験番組があって、同じような「印刷教材」があったものですから。でもあまり読みすぎるととらわれちゃうので、先生のお話しが大体わかればいいということで、2～3回読んだ程度です。

今考えますと、今度の場合あらかじめ前回の「印刷教材」があったからよかったものの、もし前回の「印刷教材」なしでスタートしなければならなかったとしたら、考えただけでもゾーッとしますね。

（浅 野）なるほどね。先生が何を言おうとしているのか、ねらいは何かがよくわからないと、番組担当者としても動きようがないということがありますよね。そんな時に「印刷教材」があれば、先生の意図がよくわかりますね。そして、「映像」にする箇所や、「図表」にする箇所などをわけて考えることができます。作戦が立つわけですよ。

ところで『人間の生物学』は基本科目になりますね。基礎科目や専門科目との差は特に意識しましたか。

(渡 部) 意識していました。基本科目としては、朝早く寒い時にボーとテレビを見ているような人達が見ても、ああなる程なあと、全部でなくても少しでもわかるような話を提供できればということを頭においてつくってききました。ゼロの人間が見てもわかるような、またテレビを見た人が関連ある本を買ってきて、その部分を深く追及してみたいかなるような番組にしたいと思っていました。わかり易さと面白さをだいじにしたつもりです。

(浅 野) よく「詰めこみ過ぎる」という話を聞くのですが、今回はいかがでしたか、内容が多過ぎたという印象は。

それともまあまあという感じですか。

(渡 部) 「大学講座」だからとある程度割り切ったのですが、私個人の意見として、やはり内容が多すぎたんじゃないかと思います。これはほかの番組にも共通していえることですが、大体大学の授業の1時間分ではとても足りないですね。講師によっては、1回分が大学の授業の2～3時間にあたるのではないのでしょうか。この辺りは、テレビの宿命なのかも知れませんね。

(浅 野) そこで、受講生の側からいえば、よりよく理解するために、何らかの助けが必要だと思います。送り手と受け手のコミュニケーションを深めるためにどんな方法がよいと思いますか。

(渡 部) よくわかりません。しかし、テレビの番組を見ながら「印刷教材」を見るというのはナンセンスだと思います。「印刷教材」は、通常の読書として読む方がよいと思います。一方、テレビはテレビとして見るのがよいでしょう。ただし、テレビの内容に沿った副読本のようなものがあれば別ですが。例えば、番組内でつけた「映像資料」とかパターンなどをまとめ

たものとか、あるいは台本をくわしくしたものとかが手元にあればいいだろうなあと思います。

(浅 野) そのほかにも、「学習センター」で先生から直接に指導を受けるとか、あるいは、手紙や電話でやりとりをするなど、いろいろなことが考えられますね。この点については、渡部さんは何か意見がありますか

(渡 部) 目的が「学習する」ことですから、そういう必要性はあると思うんです。テレビで「大学講座」を見ようとする方々は、向学心のある人たちですから、そういう人たちに対して、わからない時には、すぐ質問に応じてくれる先生が常時いることはとてもたいせつだと思います。理想的に言えば、テレビでしゃべっている先生に、電話で質問したらすぐ答えてもらえるような双方向性のシステムができれば一番よいでしょうが……。

(浅 野) 太田先生は「印刷教材」の巻末に、たくさんの参考文献をのせておられますね。先生は、テレビの講座を受身的にただ見ているだけではなく、何でも積極的に学んで欲しいと希望を述べています。

最後にこのシリーズの番組担当者として、反省点がありますか。

(渡 部) そうですね。私自身の気持としては、テレビ番組担当者というのは、足の靴をすりへらしてよりよい「映像資料」を探さないと駄目だと考えてきました。ただデスクに座って考えるだけじゃなくて、どこへいったら撮れるだろうか。じゃあ撮れなかったらどこで「映像資料」を見付けたらよいのかとかチャレンジしてみないと駄目ですね。素材がやはり勝負ですからね。

反省点としてあげられることは、やっぱりひとつの講義で、特にこのことをメインにして話したいという内容があるわけですから、それをもうちょっと掘りさげればよかったかなというのが正直なところですね。自分たちがほ



しかった「映像資料」にしても、もっと入念に準備したり、探したりすれば手に入ったのかなという気がします。あとは、番組の中でパターン（図表）が少し多過ぎたかなということですね。文字情報をもっと厳選すればよかったという感じですね。文字情報でも、3項目ていどなら、パターンにしてしまわないで、下半分にスーパーにして出して、受講生にもっと長く見せた方がよかったかなとか、いろいろあるんですよ。

（浅 野）太田先生に対する注文みたいなものがありますか。

（渡 部）太田先生は、講義をしさえすればよいのだという考えではなくて、私たちとじゅうぶん話し合っ、一緒になってやってくれました。気がついてみたら、私たちもいつのまにか先生の中に入っていたという感じでした。

先生ご自身が番組をつくるのが大好きでしたので、今思い起こせば、一般によく見られがちな講師と制作者の溝は全くありませんでした。

（完）

<渡部ディレクターとのインタビューを終えて>

インタビューを終えて感じたことをまとめておきたいと思います。『人間の生物学』は、講師の太田先生がテレビの番組出演に大へん秀でた方であり、ディレクターも意欲のある若い方でしたので、組み合わせとしては近來まれに見るほどうまくいった例で、番組の出来栄もなかなかすばらしいという評判です。

さて、このように成功した理由のひとつとして、私は次のことをあげたいと思います。それは、先ず15回を通しての全体の構想が太田先生の側に早目にできており、その細部についても先生なりの考えがまとまっていたとい

うことです。ですから番組のねらいや内容を番組担当者の方に早目に渡すことができ、ディレクターはそれに基づいて早いスタートができるという点がとてもよかったと思います。もちろん早いばかりが能ではありません。全体の見通しを持ちながら各回の準備をすすめることができたということも大きな強味です。つまり「全体」と「個」というダイナミズムが出来ていたということで、これはとてもたいせつなことだと思います。つまり1本・2本だけを視野にいれて準備するのではなくて、同時に5本目・6本目の、もっと極端に言えば最終回の番組までをも考慮にいれながら取り組むことができたという利点が生れます。渡部さんの話にあったように、ある回の資料探しにいった時に、そのあとの回に使える材料を見つけて来たというような話がありましたが、そういうこともありうるのでしょう。

教育番組の特徴は、「計画性」「系統性」にあるといわれます。その意味からもしじめに全体の計画を立て、各回のねらいをきちんとさせることが大へん重要だと思います。

次に今後の問題点として気が付いたことを2～3項目あげてみたいと思います。

- ひとつは、番組の内容が多過ぎたのではないか、番組のテンポが早すぎたのではないかという点についてですが、これにはいろいろな原因があると思います。どうもテレビの宿命とでもいいくなるような限界があるようです。つくづくテレビというのは、恐ろしいほど食欲で、多面的なメディアだと思います。内容をつめ込みすぎない講座番組を、どうしたら作ることができるのでしょうか。今後の最大のテーマであり、渡部さんが悔やしがる気持がよくわかります。

- ◎ つぎに、番組を理解するための“副読本”の必要性をあげたいと思います。番組の内容を初心者にもわかりやすく、興味をもって理解できるようにするためには、番組の中で使った写真とか図表、ビデオの一場面から再構成した“副読本”をつくるのが効果的だと思います。とくに専門科目の講座には、下地として“副読本”があればよいと思います。
- ◎ 長期取材を必要とするものは、現行のシステムでは、制約が多過ぎて全く不可能だと思います。外部のプロダクションと提携して、専門的でかつ変化の過程をとらえた「映像資料」を確実に手に入れる方策を考える必要があると思います。
- ◎ 最後に、ひとりひとりの受講者に対して綿密なコミュニケーションを保つにはどうしたらよいかについて真剣にとりくむ必要があると思います。受講者はいつも孤独のなかで学習しているわけですから、本研究のようなフィードバックの方法を摸索するための試みは大へん重要だと考えます。

＜以 上＞